藤井寺市発掘調査概報　第6号

2011年7月
藤井寺市教育委員会

北岡遺跡（KT2010－7区）

位置と環境

調査区は北岡遺跡の南端、葛井寺遺跡との境に近いところに位置する。北岡遺跡は東西750 m、南北600 mの範囲で主に古代の掘立柱建物を中心とした集落遺跡である。その他、藤井寺駅東側の南北道沿いには、7世紀から11世紀にかけての土師器を焼成するための粘土採掘坑を確認しており、南側の葛井寺遺跡を加えると1万基近く分布している可能性がある。

調査区は官衙的配置をとる大型掘立柱建物群を検出した地点（KT87－8区、KT92－11区など）の東側にあたり、東側は粘土採掘坑群が見つかっている地点である。

貸事務所建設に伴い、建物の基礎部南北2箇所合計200㎡の発掘調査を実施した。地形では東に向かってやや高くなっている。調査区は北側を第1トレンチ、南側を第2トレンチとした。遺構は出土遺物から奈良時代～平安時代前期と中世後期のものに分かれる。

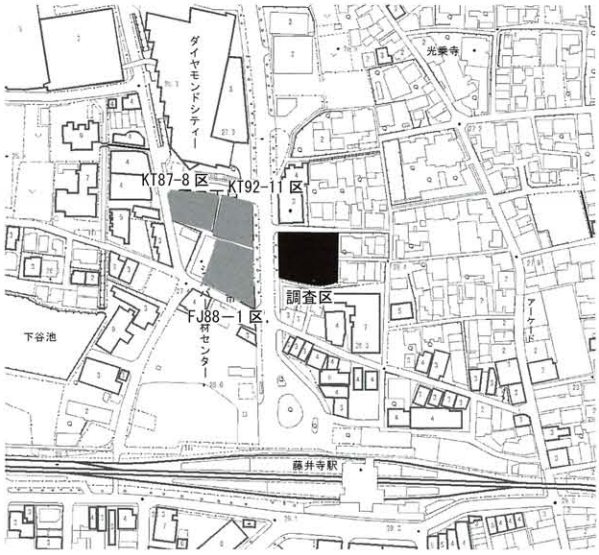


図1　調査区位置図（S＝1：5,000）

第1トレンチ

柱穴や土壙、落ち込み、溝などを検出した。

柱穴　トレンチ西側で東西に並んでいるP2～4・6は掘立柱建物の一部と考えられる。柱間隔はP2－P3が約2m、P3－P4が約2.5 m、P4－P6が約2 mを測る。

また、掘方は一辺60㎝前後の隅丸方形もしくは円形、深さは20～30㎝で、柱痕は径15㎝前後である。トレンチ東側のP7とP9も東西に2つしか並んでいないが、掘立柱建物の一部と考えたい。掘方は径約60㎝の円形を呈し、深さは15㎝、柱間距離は2.1 mである。

P20は建物として認識できなかったが、径70㎝の掘方で8世紀末の土師器が出土している。

土壙　古代と中世のものがある。

古代のものは粘土採掘坑で、主にトレンチ東側に集中する。SK08は試掘時に確認した遺構で、ほぼ全貌が確認できた。SK09とSK26が重複し

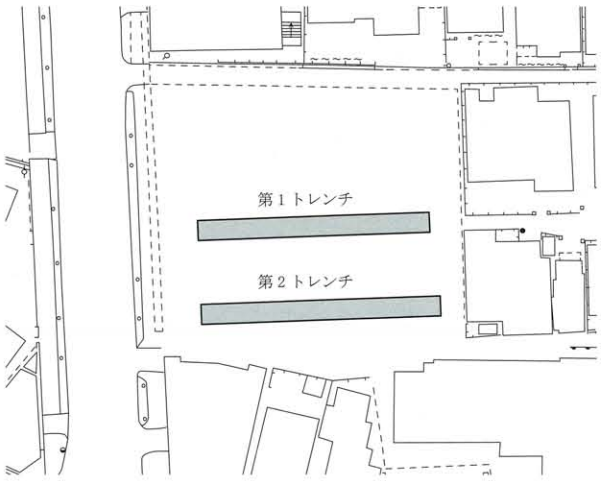


図2　トレンチ位置図（S＝1：1,000）

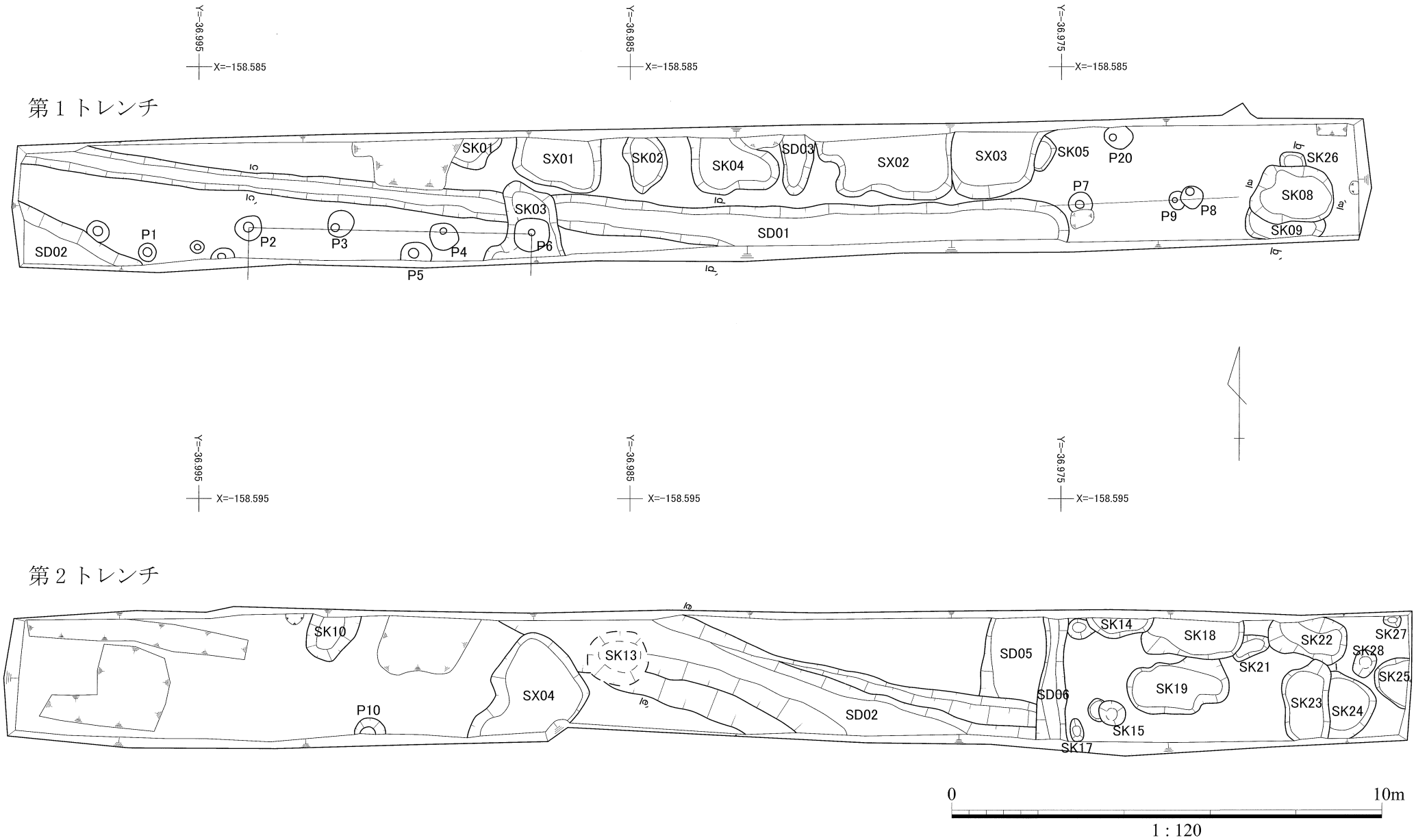

第１トレンチ
Y=-36.995
X=-158.585
Y=-36.985
X=-158.585
Y=-36.975
X=-158.585
SK01
SX01
SK02
SK04
SD03
SX02
SX03
SK05
P20
SK26
SK08
SK09
P7
P9
P8
SK03
SD01
SD02
P1
P2
P3
P4
P5
P6
Y=-36.995
X=-158.595
Y=-36.985
X=-158.595
Y=-36.975
X=-158.595
第２トレンチ
SK10
SK13
SX04
P10
SD02
SD05
SD06
SK14
SK18
SK19
SK15
SK17
SK21
SK22
SK23
SK24
SK28
SK27
SK25
0
10m
1 : 120

図３　遺構平面図

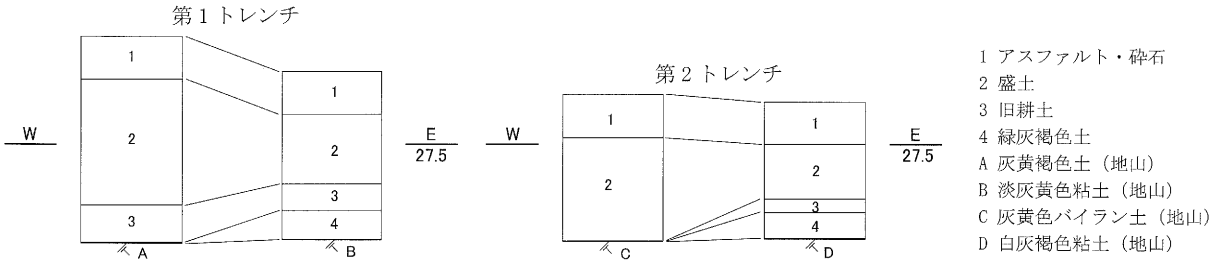


図4　標準土層図（S＝1：30）

ており、長径 1.8 m、短径 1.3m の楕円形を呈し、深さ 45cmを測る。西側をややオーバーハングさせている。なお、SK08 や SK26 からは 8 世紀末の土器が出土している。

中世のものは SK01 や SK02、03、04 などがあるが、ほとんどが深さ 10cm 程度の浅いものである。

溝　どれも中世のものである。SD01 は東西方向で、幅は東側で 85cm、西側で 65cmと西側にいくほど細くなっている。西側で深さ 25cm、東側で 15cmを測るが、底のレベルはどちらも T.P.26.85 m である。SD01 は東側で途切れているが、後述のようにほぼ直角に南側に曲がっている可能性がある。トレンチ南西部では第 2 トレンチから続く SD02 が確認できた。またトレンチ中央部北側では南北方向の SD03 が認められる。検出面積は少ないが、SD01 とほぼ直行しており、関連溝と考えられる。

第 2 トレンチ

柱穴や土壙、落ち込み、溝などを検出した。

柱穴　P10 はトレンチ西側で見つかったが、建物としては認識できなかった。

土壙　古代と中世があるが、ここでも古代のものは東側に集中する。基本的に溝より西側には延びないという特徴がある。第 1 トレンチよりも多く確認できており、SK15、18、19、22 などから遺物が出土している。

SK13 は SD02 に切られているが径 1.4 m、深さ 55cmを測り、ここからは中世後期の土器や瓦類が出土している。

溝　東西方向の SD02 と南北方向の SD05、06 がある。

SD02 は東西方向からやや南北に振っている。幅約 2 mで深さ約 35cmを測る。何度か掘り直しをしているのが認められ、SD05 を切っている。なお、この溝も第 1 トレンチの SD01 同様に東側で途切れており、ここから南側に折れ曲がる可能性が高い。SD05 は南北方向の幅 1.5 m前後で、深さ 20cmを測る。埋土の状況から SD01 から、南に直角に曲がった同一遺構と考えたい。

SD06 は幅約 70cm、深さ 20cmを測り、SD05 の肩部東側や SD02 を切っている。第 1 トレンチ SD01 の断面を見ると、中央部に幅 25cm、深さ 10cm 程度の落ち込み（SD01 － 5 層）が認められ、遺構が存在することがわかる。これは遺構検出時に分けられなかったが、SD06 から直角に曲がり、つながる可能性もある。

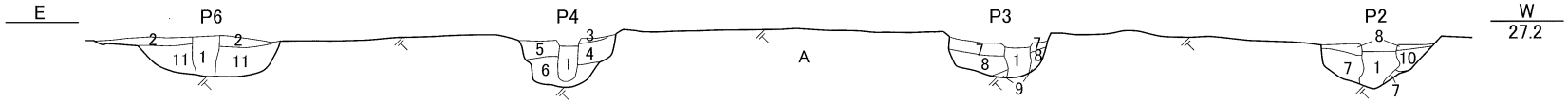
遺物

遺物は主に古代の土壙群と中世の溝から出土した。

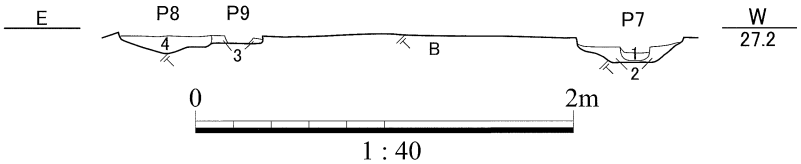
古代土器　SK08 出土の土師器坏（1・2・4）、皿（3）、鉢（5）、甕（6）、須恵器坏（7・8）と、各遺構出土の土師器（9 ～ 17）、須恵器（24・25）がある。

SK08（図 6）：土師器坏は坏 A と坏 B とがある。坏 A には口縁部 a 形態の 1、b 形態の 2 とがある。後者は口縁端部を肥厚させ内側に巻き上げている。口径は 1 が 13.8cm、2 が 15.9cmを測る。皿（3）は口縁部 b 形態で端部を外反させ口径 24.2cmを測る。外面にはミガキが認められる。坏 B（4）は高台のみの出土である。鉢（5）は口縁部端部をやや内彎気味に立ち上げており、内面に二段の暗文が

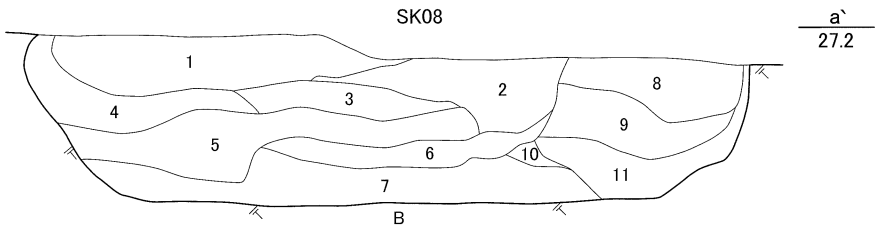
図5　各遺構断面図

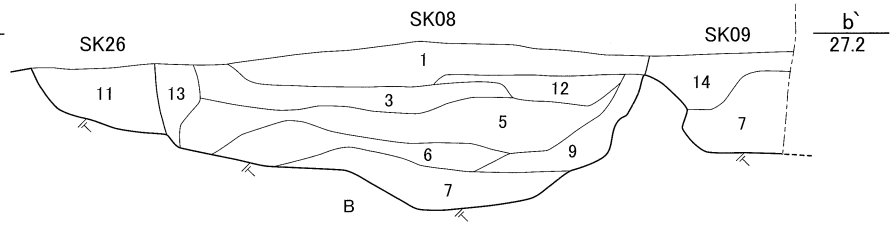


1 黄色混じり灰黄色土
2 濁灰黄色粘土
3 黄褐色土
4 褐色土混じり灰黄色土
5 灰黄色粘土
6 褐黄色粘土
7 褐黄色土
8 褐色土
9 灰黄色土
10 黄色混じり褐色土
11 褐灰黄色粘土
A 灰黄褐色土（地山）

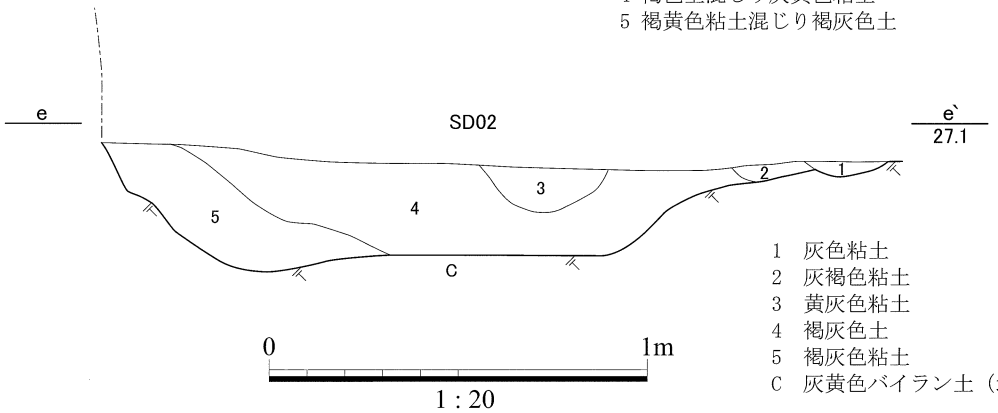


1 灰黄褐色粘土
2 黄色粘土混じり灰色土
3 灰褐色土
4 黄色粘土混じり灰黄色粘土
B 淡灰黄色粘土（地山）

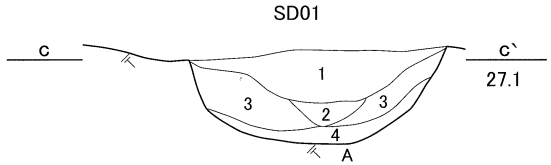


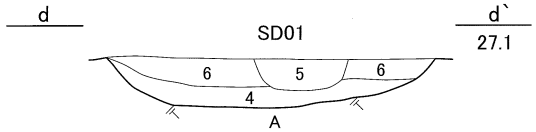


1 マンガン混じり灰褐色土
2 褐色粘土混じり灰色粘土
3 淡灰黄色粘土ブロック混じり褐灰黄色土
4 褐色土混じり灰黄色粘土
5 褐黄色粘土混じり褐灰色土
6 淡灰褐色土
7 灰黄色粘土
8 炭混じり褐色粘土
9 褐黄色粘土
10 灰色粘土
11 黄灰色粘土
12 灰褐色土
13 マンガン混じり褐灰色粘土
14 褐灰色粘土
B 淡灰黄色粘土（地山）



1　灰色粘土
2　灰褐色粘土
3　黄灰色粘土
4　褐灰色土
5　褐灰色粘土
C　灰黄色バイラン土（地山）





1 黄色粘土混じり灰褐色土
2 灰褐色土
3 褐灰色粘質土
4 灰黄色粘土
5 暗緑灰色粘土
6 緑灰色粘土
A 灰黄褐色土（地山）

認められる。甕（6）は口縁部をやや外反させ、端部は面をもたせている。口縁部径 19.3㎝、器高 17.9㎝、胴部最大径 20.5㎝を測り、径胴指数 87.3、最大径率 63.7 である。内面は丁寧にナデており、外面は手のひら全体で回転を加えながら押さえつけている。

須恵器 7 は扁平な擬宝珠つまみをもつ蓋で、8 は高台の付く坏 B である。

これらの特徴から SK08 は 8 世紀末の所産であると考えられる。

各遺構（図 7）：土師器は主に土壙出土とピット出土のものがある。9 は坏で SK26 出土である。口径 13.5㎝、器高 3.5㎝を測る。1 と同器種であるがやや深く古い特徴をもつ。10 は皿で中世遺構の SX02 から出土した古代土器である。口径 19.8㎝、器高 1.9㎝を測る。11 ～ 13 は甕で、11・13 は P20、12 は SK19 からの出土である。どれも口縁部が斜め外方に広がるものである。14 は鍋で口径 38.4㎝と大型で SK18 から出土したものである。15 は鉢で SK22 出土である。口径 29.4㎝、器高 11.6㎝を測る。口縁部は、浅い体部から「く」の字状に屈曲し、斜め上方に広がり、端部外面に面をもたせている。16・17 はミニチュア高坏で 16 が SK18、17 は P20 出土である。脚部のつくりから 17 の方が古相を示している。

なお、土師器の形態や遺構の重複関係から P20 が最も古く、次に SK19 と SK26、次に SK08 と SK18、最後に SK22 の順に掘削、廃絶したと考えられる。P20 が 8 世紀後半、SK08 が 8 世紀末、SK22 が 9 世紀前半と考えられる。

須恵器は 24・25 があるが、どちらも高台の付く壺の底部である。

中世土器　瓦質土器（18 ～ 20・23）、陶器（21・22）瓦類（27・28）などがある。

瓦質土器：18・19 は羽釜でどちらも SK13 出土である。森島分類（森島 1990）の E 型式にあたり、口縁部の形状から 15 世紀前半の所産と考えられる。20 は SD01 出土の大和型の摺鉢で、内面に櫛描の摺目が認められる。口径 31.4㎝で内彎気味の体部に小さく「く」の字状に折曲がった口縁部である。23 は SD02 出土の甕で、口縁端部が玉縁状になっており、外面の叩きも細く、15 世紀前半の所産と考えられる。また、26 は柱状の瓦質土製品で用途不明である。

陶器：21 が東播系捏鉢、22 は備前焼摺鉢で、どちらも SD02 出土である。これらの土器はどれも 14 世紀後半から 15 世紀前半のものである。

軒平瓦：27 は SD01 出土である。内区が圏線で囲まれた偏向唐草紋軒平瓦で紋様から葛井寺で使用されているものと同范である法隆寺 230A 型式で唐招提寺や薬師寺とも同范関係にある。顎貼り付け技法が認められ、14 世紀の所産と考えられる。

28 は SK13 出土である。梵字紋中心飾り均整唐草紋軒平瓦である。中世の南河内の寺院で分布しており、中心飾りの梵字紋（キリーク）の紋様から日置荘遺跡の J － 6 型式と考えられる。中心飾りの上部から唐草が下方に伸びる。13 世紀の所産と考える。近辺では塔ノ本廃寺（八尾市）で出土している。

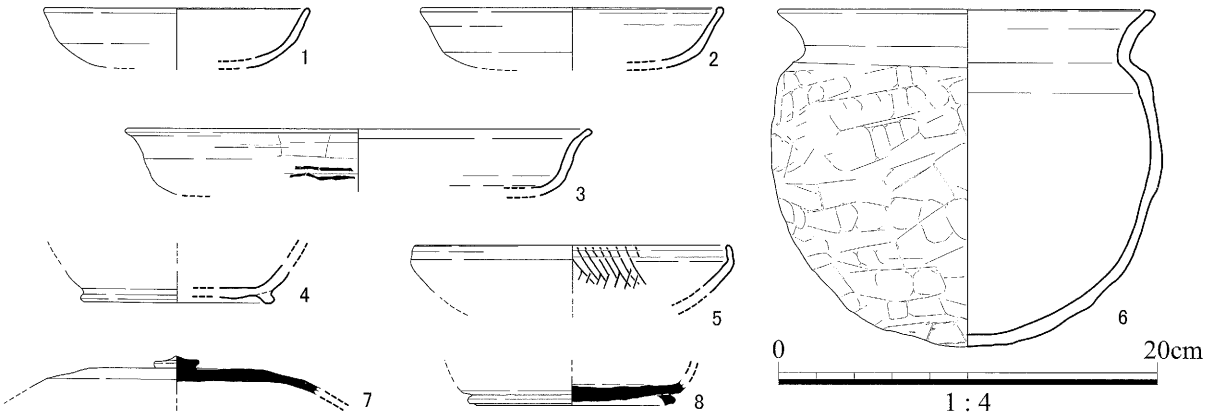


図 6　SK08 出土土器実測図

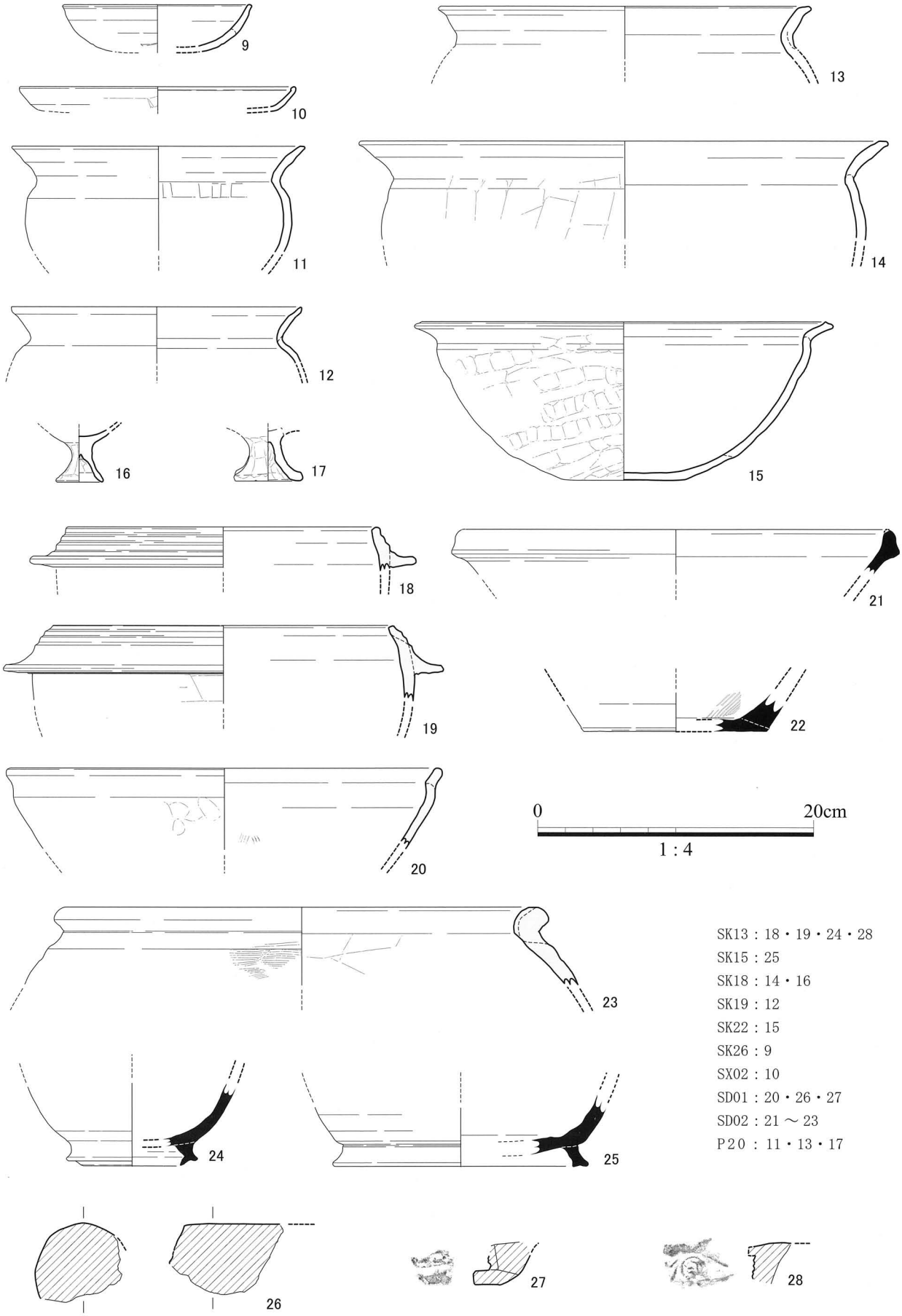


図７　各遺構出土土器実測図

まとめ

今回検出した遺構は主に奈良時代末から平安時代前半と、室町時代後半の遺構に分けられる。

この付近は古代には大型の掘立柱建物群が認められ、特に道状遺構に規制された長屋や屋・倉などがあり、官衙的建物群と位置付けられている。しかし、位置的には志紀郡と丹比郡の郡境付近にあたり、郡衙などの官衙とは考えがたい。最近、はざみ山遺跡や伊賀南遺跡などで官衙的配置をとる建物群が多く確認されている。官衙的配置をとる建物群であっても、必ずしもそのような位置づけができるとは限らないと思われる。そこで、これらは葛井氏などの有力豪族層の住居地区と考えたい。

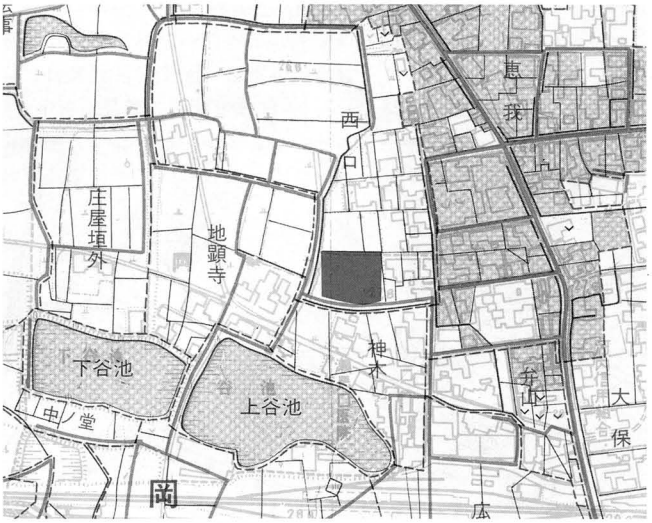


図８　調査区周辺地籍図

今回の調査区は道状遺構の東側にあたるが、地籍図を観察すると道には規制されておらず、むしろ方位に一致している。また、検出した掘立柱建物も主軸を磁北かそれに直交している。調査区東側で検出した掘立柱建物（FJ88 － 1 区など）もその傾向にある。これは、南側に位置する葛井寺との関連を考えるべきであろうか。寺院の範囲には中心伽藍の外側に寺院を経営するための修理院や倉垣院などを含んだ寺地が存在することが判明している。

また、粘土採掘坑が調査区東側に集中して見つかっているが、これは一部を除いて、住居域とは重複せず、主に南北方向の尾根筋の東北・東西に沿って分布しており、今回のものはその西端にあたる。

中世には、溝で囲まれた建物群が認められる。今回も直角に曲がる溝を検出しており、住居地域の区画溝と考えられるであろう。

長禄２年（1458）、奈良興福寺東金堂領剛琳寺（葛井寺）に丹南郡土師郷岡村庄の岡村兵庫入道雅意と弥次郎親子が造内裏段銭賦課をめぐって争っている。岡村氏は岡村庄鎮守であった春日社の神主職を代々興福寺より補任された白衣神人でここの検断権を得ていた。なお、文献から応永８年（1401）には岡村庄が成立していたことがわかる。春日社は辛国神社のことで、もともと恵美坂の字「神殿」に存在したと考えられる。「庄屋垣外」の字名付近の発掘調査では 12 ～ 15 世紀の井戸を多数検出しており、この地点でも区画する大溝を検出している。今回の調査区でも区画溝が検出されており、南側に「神木」の字名が残っており、神人である岡村氏の館跡の一部と推定できるであろう。

また、西側には「地顕寺」の字名が残り、中世寺院の一部である可能性も考えられる。軒平瓦が２点出土しているのも、その関連である可能性がある。なお、梵字紋中心飾り均整唐草紋軒平瓦は今のところ葛井寺では見つかっていない。　（上田）

≪参考文献≫
天野末喜 1988「KT87 － 8 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅲ　藤井寺市教育委員会
天野末喜 1989「FJ88 － 1 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅳ　藤井寺市教育委員会
今尾文昭 1990「大和・中世村落における瓦質土器－奈良県田原本町法貴寺遺跡出土資料－」『中近世土器の基礎　研究』Ⅵ　日本中世土器研究会
森島康雄 1990「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会
中西康裕 1994「KT92 － 11 区」『石川流域遺跡群発掘調査報告』Ⅸ　藤井寺市教育委員会
天野末喜他 1996『北岡遺跡』（藤井寺市文化財報告第 13 集）藤井寺市教育委員会
市本芳三 2006「摂河泉の平安時代から鎌倉時代の軒瓦の様相」『研究調査報告』第４集　（財）大阪府文化財センター

写真１　第１トレンチ（西より）

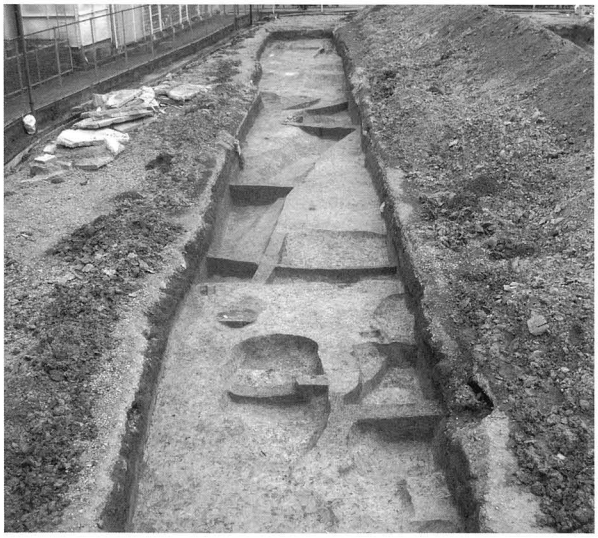


写真２　第２トレンチ（東より）

例　言

1　本書は、貸事務所建設に伴い2010年度に実施した、北岡遺跡（KT2010－７区）発掘調査の概要報告書である。調査地は、藤井寺市岡２丁目954－５に所在する。

2　調査は、申請者の依頼を受け、藤井寺市教育委員会事務局教育部文化財保護課が実施した。期間は、現地調査（外業）2010年12月７日～12月22日、整理作業（内業）2011年１月６日～１月28日である。

3　本書の作成は、上田睦、今荘ひとみ、尾崎理枝、寺崎理恵が行った。

4　図面の方位は、特に断りのない限り座標北を使用した。標高はT.P.を用いた。トレンチ位置図は、上を座標北とした。

報告書抄録

ふりがな	きたおかいせき
書　　名	北岡遺跡
副　書　名	KT2010－７区
シリーズ名	藤井寺市発掘調査概報
シリーズ番号	第６号
編集機関	藤井寺市教育委員会
所　在　地	〒583-8583　大阪府藤井寺市岡１丁目１番１号　TEL 072-939-1111(代)
発行年月日	西暦2011年７月７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
北岡遺跡（きたおか）	大阪府（おおさかふ） 藤井寺市（ふじいでらし） 岡	27226	53	34°34′22″	135°35′38″	現地調査（外業） 2010年12月７日 ～12月22日 整理作業（内業） 2011年１月６日 ～１月28日	200	貸事務所建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北岡遺跡	集落跡	古代	溝、土壙、柱穴	土師器、須恵器	
	集落跡	中世	溝、土壙	瓦質土器、陶器、瓦	